

幼 小 関 連

原 口 純 子

三学期を迎えると、年長組の子どもたちの気持は急速に小学校へと向う、担任の別れがたい気持をよそに「小学生」へのあこがれがつのる。どの子どもたし算やひらがなや漢字などを早く学びたい、勉強をしたい気持でいっぱいになっている。

こうして出ていった子どもたちが五月連休も明ければしばらくたつと、大半の子どもたちはそれなりに小学校の生活に順応していくのであるが、何人かの子どもたちは、拘束の多い学校の授業に耐えられ

ず、毎日先生にしかられたり、立たされたり、廊下に出されたりしている様子が園の方に聞えてくる。

卒園児の父母の側からは大きく分けると二手の反応がある、一つは子どもが伸び伸びとすごした二年間の園生活を肯定して、子どもを受け入れる側の小学校に授業の内容や方法についてももう少し工夫や配慮を求める声である。もう一つは、幼稚園に、もつと学校の授業のような一斉保育を求める声である。

六月の半ばに進学先の小学校の一年の担任の先生

と、送り出した側の園とで話し合いをしてみると、

「四月当初お宅の園から来た子どもたちは始業のベルが鳴っても砂場に入り込んだまま部屋に帰って来ず困りました。授業といってもあきてくると椅子を立て歩いて、勝手なことをする子などいましてね」と年配の女の先生がひどく遠慮がちに、言葉の裏側に十倍ぐらいの非難と困惑をかくしながらおっしゃる。なるほど、幼稚園では四十五分さきみではなかったし、ベルなども鳴らさないから、ベルが鳴ったら出たり入ったりするようにも指導してはいない、したがってたとえばベルが鳴ろうとも、それが我身の行動を規制する音とは知らなかったかも知れない。また園生活の中で、人の話しを聞く態度についてはかなり熱心に指導して来たつもりではあっても、興味のない話を四十五分間聞きつづけるまでには育っていないであろう。

幼稚園で元気のよい遊び上手だった男の子が、小学校の生活システムに乗りきれず、親も子も悩み、

幼稚園ではどちらかというといくどく消極的で、いわれていたことだけをしていたような子が、先生のいい子になって生き生きしている姿を見ると、幼稚園で一生懸命育てていることと、小学校の期待しているものとの間に大きなずれがあり、送る側として悩まざるを得ない。あんなに元気いっぱいだった子どもたちが、すっかりシオシオとしているのを見ると耐え難くむなし。しかられたり、しつけられたりして、六月下旬には、はみ出していた子どもたちもたいいてい小学校の生活に順応していくのである。

幼小の関連の問題は、文字を就学前にどの程度おぼえているか、とか、生活習慣の自立とか、朝顔を幼稚園で植えるのはよいが、観察は小学校の理科で、とかいった事柄ではなく、基本的な教育観の違いにあることを強く認識しなければならない。

従来幼小の関連というと、幼稚園教育を就学前教育としてとらえ、現行の小学校の教育システムを前提として、しつけに重点がおかれ、（おとなしく机

について長い間同一作業ができる) ていた、言わば幼児教育そのものが小学校に従属していたし、その時代においては幼小の関連はほとんど問題はなかったのである。教える内容が折紙や遊戯から図工や体育に変わって、自由遊びの時間が短くなっただけで、先生の指示や号令に従って子どもが動くというシステムには変化がなかったのだから。

しかしここ五年ほど、幼稚園が幼児教育のあり方に疑問を感じ、目覚めた時から(もともと大正時代から目覚めていた人々もたくさんいたが) 幼小の関連を工夫せよ、と幼稚園の課題として与えられて来た。

すなわち、六領域をあたかも教科のごとく取扱ひ一方的に教えていた保育から大きく転換をはかり、自主性や自発活動、自己充実などが強調され、決った活動を一方的に与えず、子ども自らが取り組む活動が重視されるようになった。指導法においても幼児の興味や関心に基づく指導で、幼児に拘束感を与

えないように配慮し、個人差に応じた指導を行い、内容においても生活経験に即した総合的な指導を行うようにすすめられている。

これは幼児教育のあり方として正に正論である。しかし、園がその方向に努力すればする程小学校の現行の教育方法とかみ合わないものとなる。幼稚園で育てる自主性や主体性と小学校での自主的学習態度や主体的学習態度との間にひらきが大きすぎるのである。

さて、県の出す指導方針^{注1}では「——小学校低学年教育との関係について十分理解を持つことが幼児教育をすすめる上で重要なことである」としている。

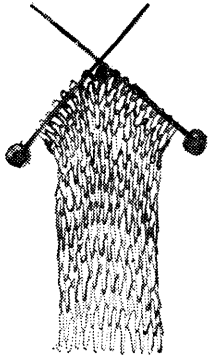
現行の小学校一年生の一学期の授業を考えると、園としては今年も三学期になると、もう少し一斉課題活動を増やして、少しでもギャップをうめておこうと、幼小関連をおもんばかるのである。

もしも小学校の教育の方でも、今ある子どもの実態からスタートする方向に今一歩歩み寄るなら、幼

小の関連の問題は解決されよう。そのためには、一年一学期の授業の方法、一時間の区切り方、内容の運び方にも工夫が今一つ加えられてしかるべきであろう、今すすめられつつある合科教育の内容に注目したい。

幼小関連の問題は一方的に送り手の問題におしつけるべきではなく、迎える側の課題ととらえる視点がもっと重視されてしかるべきではないであろうか。

注1 昭和56年度学校教育指導方針 P 23 茨城県



☆園長先生

夏休みにヘルニアの手術をしたM子ちゃんのようなすを母親から聞いたところによれば、大きい病院なので手術の前の検査・準備などがいろいろとあったらしい。だんだんと痛いのと恐怖心とが増してきて手術の前には、「いやだ、いやだ」と大騒ぎだったらしい。母親や担当の医師が一生懸命なだめて、「大丈夫よ、病院で一番えらい教授の先生が上手に痛くないようにやって下さるから」と言ったら、M子は大声で泣きながら「ウソー、一番えらいのは園長先生にきまっているわよ」 (K)

☆神様のいらっしゃるところ

時々、つくづく子どもの発想はユニークだと感心してしまふ。K子がとても真剣な顔をして話してくれる。「神様は朝はいらっしゃらないのよね。だって神様はお月様にいるのよ。太陽だったら熱くて死んでしまうでしょ。だから神様はお月様にいらっしゃるのよ。だから『神様おねがいます』って言うのは、夜するものなのね。」 (K)